



Title	ヘーゲル『大論理学』有論における「当為(Sollen)」の理論
Author(s)	大西, 健太
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 4, p. 7-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84819
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヘーゲル『大論理学』有論における「当為(Sollen)」の理論

哲学哲学史 博士前期課程 1 年

大西 健太

『論理学』が取り扱う対象は、「存在」一般である。「存在」は、しかし、最初から最後まで変化することのない、運動を欠いたものなのではない。それは、思考という境位(Element)において、自らを展開していく運動である。第一の出発点として、「純粹有(reines Sein)」として定立された「存在」は、否定と肯定を繰り返すこの運動のなかで次第に深化していき、様々な規定を獲得していくことになる。ここで取り上げる存在は、第一には、「或るもの(etwas)」としてのそれである。「或るもの」とは、ネコや地球、ミサイルのように、日常的に「存在するもの」ということで考えられるような、具体的に規定された存在である。このような存在は、以下のような規定を持っている。すなわち、「或るもの」は、また別の或るもの、「他のもの(ein Anderes)」を否定することによって成立しているということである。一つのは、例えばネコならば、「ニャーと鳴く」、「四本足で歩く」、「涼しくなると外に出てくる」など、本質的であると思われるものからそうでないものまで、多くの規定性を持っている。地球について言えば、「丸い」、「大きい」、「月を衛星として持っている」など、ミサイルは「目標に向かって飛ぶ」、「爆発する」などである。ここで、上の三つのうち、2つを選んで関係させてみよう。ネコとミサイルを取ってみると、まず明らかなのは、「一方は他方とは異なっている」ということである。当然、ネコはミサイルではないし、ミサイルはネコではない。それではこの二つが異なっていると言えるのはなぜだろうか？それは、一方が持つ規定性を他方は持っていないということによるだろう。ミサイルはニャーと鳴いたりはいないし、四本足で歩かない。ネコも、標的を追尾して飛んで行き爆発することはしない。こうした規定性を全て抽象してしまえば、どちらも単に「在る」とだけしか言えないような、その意味で絶対的な無差異の境地にあるものとなってしまう、具体的な規定態ではなくなるだろう。それで明らかとなるのは、「或るもの」が「或るもの」として成立するのは、対立する「他のもの」と関係し、その中でこれを、自らの規定性を介して否定するからに他ならないということである。言い換えれば、「或るもの」としての存在には、他に対する否定的な関係というものが必然的に含まれているのである。以上のことは、例えば次のように言い表されている。

「或るものはこのように自分自身からして他の物に関係することになるが、それは他在が或るもの自身の契機として或る物の中に措定されたからである。」[p,143|Su.p,135]

「或るものは他の物に対して否定的に関係するものとして、同時にまたその否定することによって自分を維持する…」 [(同上)]

「或るもの」は「他のもの」を否定するものとして存在する。しかしまたこの「他のもの」も一つの「或るもの」である。したがってこの二つはともに、一方では、「即自有(Ansichsein)」(注)として、ただしその内に「他のもの」という自身の否定であるものを、それを否定する(否定の否定)ために、本質的に持っている即自有として在る。他方で、これらは互いに否定しあうのだから、その点で相手と関係するものでもある。或るものには他のものの否定が不可欠なのであるから両者は接触するものの、当の接触の結果、否定しあって反発し、分離するものであるということは、両者に共通する条件である。これが、「或る物」にとって必然的なものとして定立された「限界(Grenze)」である。

(注) 自身に即して (an)、つまりそれ自体としてそのまま、また自身の本分に則って存在する在り方。

「或る物」が一個の「或る物」であるためには、「限界」を必要とする。とはいえ、それは「或る物」の外に在るようなものではない。もしそうならば、上で見たように、「或る物」はそれ自身としては何らかのかたちで規定された存在、「或る物」ではないことになるからである。こうして、この「限界」が「或る物」一般に、それが成立するために不可欠の契機として含まれているということが示された。それで、「限界」とは、「或る物」にとって本質的で、不可分なものであることになるが、しかし、「限界」と当の「存在」(＝即自有)とは、やはり別のものである。この二つは、単に言葉の上でだけ区別されているにすぎないようなものではない。それはちょうど、(「或るもの」としての)「私」は、自らが有している「限界」によって、他者から区別され、そうすることによってはじめて「私」たりえているという場合に、しかし、ここで成立している「私」という存在は、やはり当のその「限界」からは区別されているということである。つまり、どちらも同じ一つの「或る物」のもとに在りながら、同時に区別されているような契機なのである。そうであるならば、この二つの契機、「即自有」と「限界」との関係は否定的な関係である。すなわち、即自有は「限界」でないものとしてその否定であり、「限界」もまた即自有とは異なるものである。このようにして、それぞれ「或る物」に本質的に内在するものでありながら、互いに否定的関係に立つ二つの契機として定立されるとき、その「即自有」は「当為 (Sollen)」と呼ばれ、また「限界」は「制限 (Schränke)」となる。この「或る物」の内における二契機の互いに対する否定的関係から、事物の「有限性(Endlichkeit)」が演繹される。ヘーゲルによれば、生成変化を常とする限りでの事物が、まさにそのような、絶えず生起しては消滅するものであるという事情は、それら「或るもの」が自身の内に含んでいるところの二契機、「即自有」と「限界」との、かの否定的関係のためである。すなわち、「或る物」は、「制限」を通して、現にある

ところのものとなっているのであるが、その「即自有」はと言えば、それはこの「制限」を否定するものであるから、したがって、自身の成立根拠を必然的に自らの手で崩してしまうのである。存在が「或る物」として提示される限り、万物は存在するために、自身が存在するならばすなわち自らの存在の必然的な否定を備えたものとして存在せざるを得ないという条件を了承しなければならないということである。「或る物」には、その「終わり (Ende)」が本質的に内在する。つまり、それは「有限的なもの (das Endliche)」なのである。

「だから、有限的なものにとっては、それが滅亡しないということもあり得るというのうちに、その滅亡が単に可能なことではない。むしろ有限的な物の存在〔有〕そのものが滅亡の萌芽を自分の自己内有としてもつものにほかならない。即ち、その生誕の時はその死の時なのである。」 [p,148|Su.p,139/140]

ヘーゲル自身が挙げている植物の例について見るならば、次のようになる。

「或る存在が概念を単に抽象的な即自有としてもつだけではなくて、向自的に〔自立的に〕存在する全體性として、例えば衝動、生命、感覺、表象等としてもつときには、この存在そのものが自身で制限の超越を企て、その超克を成し遂げることになる。植物は萌芽であるという制限を超えるとともに、また花、果實、葉であるという制限を超える。即ち萌芽は發育した植物となり、花はしぼむ等々。」 [p,157|Su.p,146/147]

およそ「有限的なもの」であるものは、必然的に自らの「制限」を超えるのであるが、この例からも分かるように、その「終わり」とは、一つの存在の端的かつ完全な消滅ということではない。確かに、「有限的なもの」は自身の超越という原理的に不可避の過程をたどるのであるが、しかし、芽としての植物が否定されて花が咲き、さらに花としての植物が否定されれば実がなるというように、「有限的なもの」の連鎖それ自体が途切れることはないのである。ここでは「有限的なもの」の「制限」の超越の結果として、また別の、ただしこちらも同じく「或る物」である限りでの、一個の存在が発生してくるのである。目の前にあるのは、「有限的なもの」絶えざる連鎖である。しかし、「この結果を更によく見れば」とヘーゲルは言う。そうすれば、一つの「制限」が超越されるとき、そこにはまた、その「制限」に対応していた「当為」の完成が認められる。このことは、つまり、その存在が「当為」としての「即自有」と一致したということに他ならないのであり、それはまた自身のその「制限」の消失なのであって、「制限」のないもの、すなわち一個の「無限者 (das Unendliche)」の生成である。ここに生じた「無限者 (das Unendliche)」なるものについて、先の例で言えば、次のようになる。種として在る植物とは、「種である」という「制限」を持ち、「萌芽」を「当為」とするものであるが、この種が芽生えに到達するとき、それは前の「制限」をもはや持たないもの、そしてこのようにして自身の本来あるべき姿としての「即自有」を実現

している。この意味で、「萌芽」は確かに「制限」無きもの、「無限者」である。しかし、ヘーゲルによれば、このような「無限者」は未だなお、真なる無限者でない。一つの「制限」が否定され、一個の当為が実現されたとはいえ、当の結果もまた、一つの「有限的なもの」であるというこの無限者は、「悪無限 (das Schlecht-Unendliche)」なのである。「悪無限」とは、単に「有限的なもの」でないというだけの「無限者」なのであるが、これはまた一つの「有限的なもの」である。なぜなら、「有限的なもの」を「有限的なもの」たらしめている条件とは、先に見たように、他のものに対する否定＝「限界」を持つということなのであるが、ここでいう「無限者」とは、この「限界」を「有限的なもの」に対して持っていることによって、その条件を満たしており、したがって、一個の「有限的なもの」としての「無限者」、「有限的な無限者 (das endliche Unendliche)」ということになるからである。つまり、ここでは、ある「有限的なもの」から他の「有限的なもの」への無際限に続く移行が、一つの「有限的なもの」から（それ自体有限である限りでの）「無限者」への移行として定立しなおされているのである。とはいえ、この段階ではまだ、「無限者」は「有限的な無限者」、すなわち「悪無限」なのであり、それゆえ直ちにまた一つの有限者となって、ある有限者から他の有限者への絶えざる移行を形成する。無限が真無限として定立されない限り、つまり単に有限でないというだけの無限である限り、この単純な交替運動の累進は無限に続くのである。それでは、その真無限とは一体どのようなものなのだろうか。自らの否定を自身の内に持ち、その否定を否定することによって専ら自己に反省するような無限性が「真無限 (die wahre Unendlichkeit)」である。これは、先の「有限性」とその単に抽象的な否定である「悪無限」との果てない累進において認識された真理であり、こちらが際限なく延長される直線に喩えられるのに対して、それは一つの円環として表現されるように、無限と有限を自身の契機として含んでいる、一個の自己充足的な全体である。すなわち、ここに到って、先の「有限的なもの」も「悪無限」とされたものも、各々その否定としての他者を否定することによって自らの内へと「反照する (reflektieren)」という点で一致し、これらをその契機として含むような「真」なる無限として定立されたのである。

以上、具体的個別的な存在としての「或る物」と「他のもの」との関係から、「有限的なもの」と（「悪無限」としての）「無限者」の止揚を経て、「真無限」が定立されるまでの過程を見てきた。そこでは、「当為」としての存在が自らの「制限」を超越するための、一層俯瞰的には、「有限性」から「無限性」一般の演繹へのキーコンセプトとしての役割を果たしていたのであった。存在論であるとも言われるヘーゲルの「論理学」において、他の諸要素同様その体系内に位置付けられた「当為」とは、すなわち存在一般にとって不可欠な要石の一つなのである。

原典は G. W. F. Hegel 『die Wissenschaft der Logik』 (1812-1816)、翻訳は『ヘーゲル全集 6a 大論理学 上巻の一』 (武市健人、岩波書店、1956 年)を使用した。